

タマちゃんとの正しいつきあい方

動物ジャーナリスト 宮本拓海

1. はじめに

去年、そして今年も日本中を釘づけにしているのがアゴヒゲアザラシのタマちゃんです。昨年は流行語大賞にも選ばれたタマちゃんですが、どれほど正しく理解されたかとなると少々心もとないものがあります。タマちゃんとうつきあっていくべきか考えてみましょう。

2. アザラシのこと

アザラシにアシカにオットセイ。どれも海にすむ哺乳類ですが、これらの違いはわかりますか？ 実際にアザラシとアシカの絵をかいてみるとわかると思うのですが、これらの違いをはっきりと認識している人は専門家以外ではほとんどいないでしょう。

一番わかりやすいのは姿勢の違いで、アザラシは地面にべったり寝そべった格好、アシカは前足で体を起こした格好となります。でも、アザラシとアシカの本当の違いは姿勢ではありません。英語ではアザラシは「耳たぶの無いアザラシ」、アシカは「耳たぶのあるアザラシ」と言うこともあります*1。図鑑があるなら写真をじっくり見てください。アシカには小さな耳たぶがありますが、アザラシにはありません。また、英語ではアザラシを「はうアザラシ」、アシカを「歩くアザラシ」とも言います。ここでもまた図鑑をよく見てほしいのですが、アザラシは後ろ足は前に曲げられませんし、前足も短いので、陸地では地面をはうことしかできません。アシカは後ろ足を前に向けることができ、また、前足も大きいので、地面を歩くことができます(そして上体を起こせる)。他にもいろいろ違いはありますが、耳たぶと足が一番わかりやすい違いです。

アザラシ、アシカの仲間は表のように分類されています。セイウチはアザラシともアシカとも違う仲間です。オットセイ、オタリア、トドは「～アシカ」と名前はついていませんがアシカの仲間です(どれも耳たぶがある)*2。

海の哺乳類というと、イルカやクジラが有名ですが、アザラシ・アシカはその仲間ではありません。

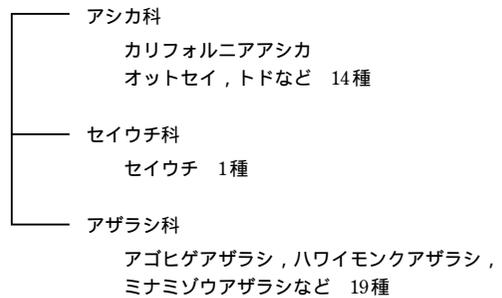


表 アシカ・アザラシの仲間の分類

アザラシ・アシカはイヌやネコ、クマの仲間なのです。これらは「食肉目(ネコ目)」と呼ばれる仲間です。その名前の通り動物を食べています。ただし、中にはクマやパンダのように植物を主に食べるものもいます。アザラシ・アシカは魚やエビ・カニなどの動物を食べています。

食肉目の特徴は、大きな犬歯です。イヌやネコの歯を見るとすぐにわかりますが、上下に2本ずつの大きなキバがあります。あれが犬歯です。アザラシも食肉目の仲間ですので、当然大きな犬歯があります*3。しかも、アシカ・アザラシの大半は体長2m以上、つまりイヌやネコの何倍もの大きさですから、犬歯も大きく、かむ力もかなり強いでしょう。ほとんどの人はアザラシを「かわいい!」と思っているようですが、実際は近づくにはちょっと危険な動物なのです。

*1 英語では「earless true seals」、「eared seals」。もちろんどちらにも「耳」はある。アザラシに無いのは正しくは「耳たぶ」。これらは学問的な言い方で、普通はアザラシは「seal」、アシカは「sea lion(海のライオン)」と言う。

*2 アシカとオットセイの違い=オットセイの毛は長い毛と短い毛の二重になっていて、保温性に優れている。アシカには短い毛はない。オットセイの方が寒い気候に向いているといえるが、赤道直下のガラパゴス諸島にもオットセイはいる。

*3 セイウチの長いキバも犬歯である。アゴヒゲアザラシは例外的に歯があまり成長せず、犬歯もはっきりしない。それでもかむ力は強いと思われるので、危険なことにはかわりはない。

3. アゴヒゲアザラシのこと

では、タマちゃん = アゴヒゲアザラシとはどんな動物なのでしょう。

アゴヒゲアザラシのいる場所は、北極海が中心です。一番南の場所はオホーツク海、北米のセント・ローレンス湾です。ですから、日本でも北海道で目撃されるのは不思議なことではありません。アザラシは寒い場所の動物というイメージがありますが、日本の本州周辺でもゴマフアザラシやワモンアザラシが目撃される可能性はあります。国立科学博物館の「海棲哺乳類情報データベース」*4で調べてみたところ、1980年～1996年で北海道を除く地域でアシカ・アザラシ類が確認された例は84件もあります(死亡例も含む)。年平均にすると約5回にもなるわけで、実はそれほど珍しいということでもないのです。ただ、アゴヒゲアザラシはわずか4件ですので、その意味ではタマちゃんは珍しい例とも言えます。

アザラシは海にいる種類がほとんどですが、アゴヒゲアザラシは川で見られることもよくあるようです。タマちゃんが川に現れたのに驚いた人もいますが、これは別に珍しいことではないようです。それに、タマちゃんが目撃された場所は河口に近く、ほとんど海に近い環境とっていいでしょう。びっくりするようなことではないのです。

図のように、アゴヒゲアザラシの体長は最大で2.5mにもなります(あなたの身長と比べてみてください)。メスのほうがオスより少し大きいようです。体重はメスで350kgを越えることもあるそうです(重い!)。タマちゃんが子どもだと判定されたのは、それよりもずっと小さかったからです。

アザラシの食べ物というと、魚を想像する人が多いでしょうが、実際は魚の他にもエビやカニ、タコ、イカなどいろいろな海中動物を食べています。食べるものは種類や場所によって違ってきます。アゴヒゲアザラシは魚以外の小型動物(エビやカニや貝?)を食べる割合が多いようです。

都会の川は汚いので食べるものが無いのでは、と心配した人もいたようですが、「汚い = 生物がいない」ではありません。現在の日本で、動植物が生きられないほど汚れた河川はほとんどないでしょう。水質が多少悪くても何らかの生物は必ずいるのです。また、タマちゃんの行動をみると、数日間海に行きそれから川に戻ってくるようです。川だけでなく、東京湾でも食料を調達しているとみていいでしょう。アザラシやアシカは水面に浮かびながら寝ることもできますので、川でしばらく姿が見えなくなっても心配はありません。

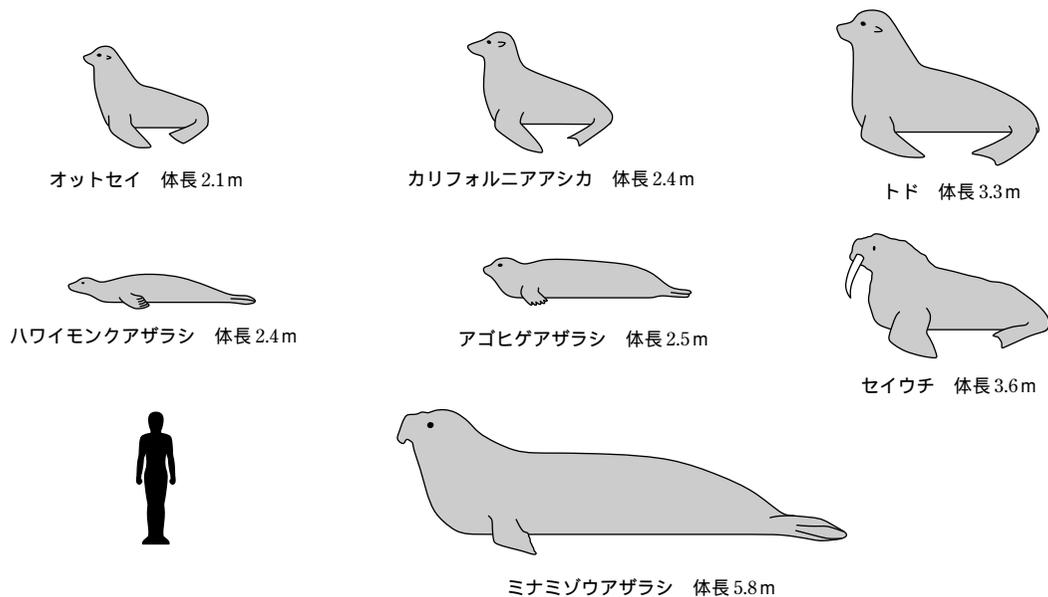


図 アシカ・アザラシの仲間の大きさ比べ
体長(=頭胴長)とは、胴体をまっすぐに伸ばした時の鼻先から胴体後端までの長さ(尾や足は含めない)。

とは絶対にしないでください。

マナーその3 食べ物を与えない

動物に食べ物をあげるのはいいいことだ、と知っている人は多いかもしれませんが、これは間違いです。野生動物は自力で食べ物を探し出せる力を持っています。人間が世話を焼く必要はまったくないのです。

また、人間が与える食べ物には栄養の問題もあります。アザラシは、エビ・カニ・魚を丸ごと食べています。例えば魚には、肉、血、内臓、骨が含まれますが、これらを全部食べるので栄養のバランスがとれているのです。人間のように肉の部分(筋肉・脂肪)だけを食べるのでは十分な栄養はとれません(人間は他にも穀物や野菜を食べることで栄養のバランスをとっている)。アザラシなら魚が好きだろうと勝手に考えて焼き魚や干物を与えては栄養に問題があるのです。まして、パンやお菓子ではまったく意味がないのです。

以上の、3つのマナーは絶対に守ってください。この3つのマナーに共通しているのは、「アザラシの生活を妨害しない」ということです。アザラシが普通の生活ができるように、静かに見守るといことなのです。

残念ながら、タマちゃん騒動ではこれらがまったく守られていません。野生動物にとって一番いいことは何なのか、よく考えて観察しましょう。

*5 国立科学博物館にもご一報を。

*6 筆者も経験が無いことなので、はっきりした数字は書きにくいのだが、とにかく最初は十分に距離をとるようにしたい。

5. もし実際に観察するなら

さて、もし私がアザラシを観察するならばどうするのか、書いてみましょう。

アザラシが海岸にいるとします。最初は数百mの距離から観察します。観察は一人あるいは多くても数人以下でやりたいところです。人数が多いほど動物を刺激するからです。アザラシにはとにかくゆっくり接近します。アザラシに向かってまっすぐ近づくのではなく、ジグザグに近づいていくのも驚か

*4 国立科学博物館・海棲哺乳類情報データベース

<http://svrsh1.kahaku.go.jp/index.htm>

「ストランディング検索」で探すことができる。このデータベースは海の哺乳類のストランディング(座礁)情報を収集したもの。ストランディングは年に100～200件発生しており、そのほとんどがイルカ・クジラである。

4. 観察のマナー

もし、あなたが住んでいる近くにアザラシが現れたとしたらどうすべきでしょうか。海岸近くに住んでいるならこれはまったくありえないことではありません。

もしあなたが第1発見者ならば、近くの水族館、市町村役場、都道府県の漁業関係部署に連絡をしましょう*5。アザラシが弱っているような場合はなんらかの対処をしてくれるでしょう。アザラシが元気ならば、水族館も役場も何もせず見守ることになります。絶対にしてならないのは、個人的な思いつきでアザラシを扱おうとすることです。かならず専門家の見解を聞き、指示に従うようにしてください。

アザラシがしばらくそこにい続けるならば、観察をしてみるのも悪くありません。ただし、観察する時には守らなければならないマナーがあります。

マナーその1 近づきすぎない

野生動物は人間が近づくと、驚いたり、ストレスを感じたりします。無理に近づかないでください。どれくらい離れなければならないかという、これは動物の種類によっても違ってきますが、アザラシなら100m、少なくとも50m以内には近づかない方がいいでしょう*6。たとえ100m以上離れていても、アザラシがこちらをじっと見つめて警戒しているようならば、それ以上近づいてはいけません。なるべく遠くから、アザラシの様子を見ながら少しずつ近づいていきましょう。

マナーその2 大声を出さない

大声を出すと、やはりアザラシを驚かせてしまいます。人間でも近くでライオンがほえればびっくりします。アザラシにとっては人間はわけがわからない大きな生き物にしか見えません。人間がぎゃーぎゃーさわげば、アザラシも落ちつかないでしょう。「ちゃん！」などと大声で呼びかけるようなこ

せないコツです。近づく時には、アザラシの様子に常に注意しましょう。アザラシがこちらに気がついたようならば、そこでストップ。アザラシがなおもじっと見つめるようならば、目をそらしたり、横を向いたりすることも必要です(君には興味無いよ、というふりをする)。それ以上近づけるかどうかは、アザラシの様子から判断するしかありません。もっと近づくなれば、数日かけて少しずつ距離をつめていくぐらいの慎重さが必要です。近づく時、観察の時はできれば体を低くしましょう。大きい生物が近づいてくるとやはり驚くだろうからです。100mも離れていれば、ほふく前進までする必要はありませんが、できるだけ小さく見せる努力はしましょう。木や堤防など体を隠す場所があるならば、そこから観察するのがいいでしょう。

そこまで慎重にならなければいけないのか、と疑問に思われるかもしれませんが、野生動物本来の生活をじゃましないためにはこれぐらいの配慮は必要です。

最後にもうひとつマナーを補足しておきましょう。もし、専門家(研究者や水族館の職員)がその場に来ているなら、専門家よりも前に出ないようにしましょう。専門家はアザラシを驚かせないよう距離を保って行動しているわけですから、それよりも近づいてはアザラシを驚かせる可能性が高いわけです。また、専門家は何か目的を持って来ているわけですから、それをじゃましてはいけません。

以上で紹介したマナーは、他の野生動物を観察する時でも同じように守ってください*7。大原則は「野生動物の生活を妨害しないこと」。これが「自然保護」でもあるのです。

*7 近づいていい距離は、動物の種類によって、また周囲の状況によって違って来る。これは自然観察の経験をつんで学習していくしかないだろう。

参考文献

- (1) トマス・A・ジェファソン他著、山田椋(やまだ・ただす)訳:『海の哺乳類 FAO種同定ガイド』(NTT出版)
クジラ・イルカも含めたデータベースとしては最もよくまとまっている。やや専門的な内容だが、用語の解説もされており、基礎資料として役立つだろう。
- (2) Joseph R.Geraci/Valerie J.Lounsbury 著、山田椋(やまだ・ただす)天野雅男(あまの・まさお)監訳:『ストランディングフィールドガイド 海の哺乳類』(海遊舎)
アメリカで発行された、海の哺乳類の座礁を救出するための教科書。かなり専門的ではあるが、内容は非常に具体的。興味のある方には一読をおすすめする。アシカ・アザラシの場合についても詳しく解説されている。

執筆者

宮本拓海(みやもと・たくみ)

動物ジャーナリスト、イラストレーター。

1967年福岡市生まれ。(株)アスキー勤務時に『マルチメディア昆虫図鑑』『マルチメディア魚類図鑑』『マルチメディア爬虫類両生類図鑑』などのCD-ROM書籍の編集・ディレクターを担当。1999年、同社を退社。以後、フリー。

雑誌「リラティオ」(チクサン出版)で「動物事件の読み解き方」連載(現在は休刊)。最近は小学館のウィークリーブック『週刊日本の天然記念物 動物編』に編集、イラストなどで参加。

個人ホームページ<http://www.mars.dti.ne.jp/~takumi-m/>で『いきもの通信』を毎週執筆。